り唐の末つ方でございまして、支那では佛教全盛時代以後のことでありますから、其の後に於てウイグルの佛教から影響を受けるやうな次第は先づ少ないと思ひます。

佛典の事は大略さう云ふ次第でございますが、此の佛典を一の學問の資料として、他の方面から考へて見ますと極めて有益な材料といはなければなりませぬ、先づ第一に言語學の方面から頗ぶる貴重なものであります、抑もアルタイ語の系統の古い文獻で、完全に殘つて居りますのは、十一世紀以前のものは殆んど無いと言つても宜しいのでありまして、碑文の斷片などが少々殘つて居りますけれども、それに依て多くの古への單語を知るとか、精しい文法を探るとか云ふことは殆んど不可能であります、然るに今かゝる佛典が色々出まして、而もそれが漢文を飜譯したのが少くないのでありますから、兩者を對照して見ると、言葉なり文典なりの性質がよく分つて來るのであります、現に此等の經によりまして文典の上に、また言葉の上に、今日迄に悟り得られたことは決して少々ではありませぬ、又歴史の方から考へて見ましても、此中に現はれて居ります言葉に依つて、從來種々分らなかつた事柄を闡明し得ることが少くないのであります。

極めて大體のことより御話申すことが出來ませぬで甚だ殘念でございますが、細かい事に至りましては、更に他日、機會を得て申し述べたいと思ひます。（拍手）

（大正三年四月一日史學會第十六回大會公開講演會において）

此の講演は多少通俗にしようとしたが爲に冗長な序說を述べ、時間の運用を誤つたが爲に本論に於て省略した所が多い、改作の上で雜誌に登載したいのであるけれども、今は其の時間がないから、字句の修正と、典據の揭出とに止め、他日更ためて讀者諸君の教を仰がうと思ふ。（五月二十八日記す）